

二〇一八年度 卒業論文

真宗教義から考える現代の社会問題

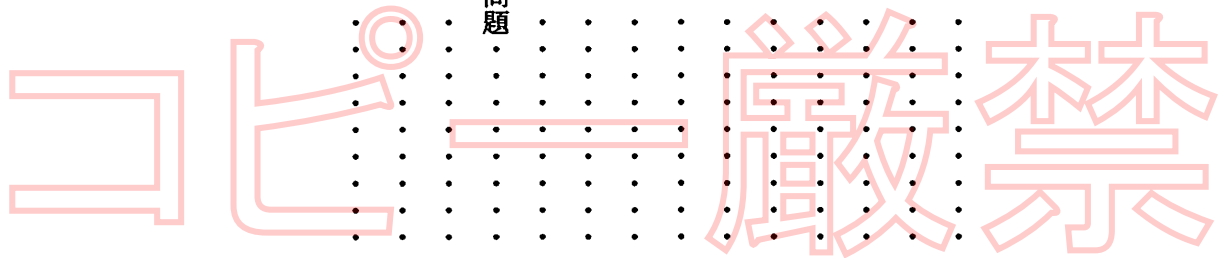
コピー 禁 廠

L140037

蒲生蓮音

目次

序論	1
本論	1
第一章 真宗教義から考える自然災害への対応	1
第一節 親鸞は災害の時、どうしたか	1
第二節 悲しむ心に寄り添うこと	4
第三節 生きていくうちに考えておくべきこと	8
第二章 真宗教義から考える差別問題	10
第一節 親鸞の平等観	10
第二節 「宿業」についてどう考えるか	15
第三節 他者をどうみるか	16
第三章 真宗教義から考える現代の生物に関する諸問題	18
第一節 浄肉文から肉食を考える	18
第二節 人間以外の視点で考える	20
結論	22
註	
参考文献	



## 序論

私たちの生きる現代は、災害、格差、環境問題など様々な問題で溢れている。それに対して多くの人が科学、技術的アプローチからこの問題に取り組んでいる。実際、地震大国である日本では、一人でも多くの人を救うため、防災アラーム、免震・耐震技術、防波堤の設置など様々な取り組みがなされている。だが一方で、災害で人が死ぬことによる残された人への心のケアや差別問題など、科学的に解決できないことについては「仕方がない」と諦めの姿勢でいることが多いのではないだろうか。「仕方がない」という言葉は、その場しのぎのものでしかなく、人びとの心には何だかわからない恐怖のみが蓄積されていく。また、社会問題の多くは、人間の自己中心性からきており、それが原因で互いに傷つけあったり、環境を破壊したりする。

そのような不安を解決する一つの方法に宗教があるのではないだろうか。この論文では数ある宗教の中でも、浄土真宗や仏教の教えから現代の社会問題にどう取り組むべきかを論じる。

## 本論

### 第一章 真宗教義から考える自然災害への対応

#### 第一節 親鸞は災害の時、どうしたか

現代の日本人が災害といわれて真っ先に挙げるのは、東日本大震災だろう。二〇一一年三月一日、宮城県沖を震源とする地震で一万八千人以上の方が亡くなった。前日まで何事もなかった生活を突然奪われた人間に私たちはどう関わっていけばよいのだろうか。

まず、親鸞が災害に直面した時、どのような行動をとったのかを三部経千部読誦のエピソードから考察する。承元の法難による越後への流罪を解かれ、親鸞は関東へ向かった。その道中、彼は上野国の佐貫（現在の群馬県）で大飢饉に遭遇している。飢えに苦しむ人びとを目の当たりにした彼は、せめてものという思いで『大無量寿経』・『阿弥陀経』・『観無量寿経』からなる浄土三部経を千回称えることを思い立った。しかし、彼はその後読経を中止したのだ。恵信尼消息にこのように記されている。

この十七八年がそのがみ、げにげにしく三部経を千部よみて、すぎう利益のためにとて、よみはじめてありしを、これはなにごとぞ、「自信教人信 難中転更難」とて、みずから信じ、人を教えて信じしむること、まことの仏恩を報ひたてまつるものと信じながら、名号のほかにはなにごとの不足にて、かならず経をよまんとするやと思ひかへして、よまざりしことの、さればなほもすこし残るところのありけるや。人の執心、自力のしんは、よくよく思慮あるべしとおもひなしてのちは、経よむことはとどまりぬ。」

これは、親鸞の妻である恵信尼が娘の覚信尼に親鸞のことを伝えるために書かれたもので、現代語訳は次の通りである。

十七八年ばかり以前のこと、衆生利益のために三部経すなわち無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経を千部読も

うと思つて読みはじめたが、これはとんでもないことである。自信教人信、難中転更難とあるとおり、自ら信じ人を教えて信ぜしむることが、まことに仏恩を報謝したてまつることであると夙に信じておりながら、名号を称えてよろこぶほかに、何の不足あつて、かならず経を読もうとするのかと思いかえして、読まないことにしたのであつた。(中略)これによって人の執心、自力の心というものはしつこいものであることがわかる。〴〵

念仏を称える以外に救われる道はないとわかっているが、苦しんでいる人を目の当たりにすると何もせずにはいられないという彼の人間としての葛藤が伝わってくる。しかし、いくら自分が努力して、自力によって人を救おうとしても思い通りにならないし、救えたとしても今、目の前にいる人しか救えない。彼は救いということに究極につきつめた結果、念仏して仏となり、思いのままに衆生を救おうという考えに至つたのだろう。このことに関して、福島栄寿氏がこのように述べている。

思えば、仏道を歩む親鸞の願ひとは、人びととともにありつつ、自他がともに救われる世界が開かれるということであつたはずである。そのために、親鸞は、念仏を称え、急いで仏にならなければならない、と述べたのである。急いで仏になろうとするのは、もちろん人々を救うためであり、自分一人が救われればよいという念仏ではない。(中略)私が仏になりたいと願うこと、それは、人びとを助けたいと願う心と表裏一体だということである。〴〵

親鸞が苦しむ人の前で念仏することの意味は明らかになつた。だが、現代で災害にあつていてる人に、「ただ念仏す

るだけで救われます。」と説いて、はたして人は納得するだろうか。福島氏は先述に続いて、

飢餓に苦しみ、生死の極限状態に追い込まれた人びとを前にした親鸞は、読経という「聖道の慈悲」の限界を感じて葛藤しつつ、それでも、ただ念仏を称えているだけでよいのだろうか、と自分の無力さに打ちひしがれ、苦しみもがいていたのではなかったか。そんな親鸞であるがゆえに、確かに、念仏で人びとの飢餓は救えない、しかしせめて、飢えに苦しむ人びとの心に寄り添いながら、彼らとともに念仏を称えていこう、そう決心したのではなかったか。\*

と述べている。究極の救いについて考えていた親鸞だからこそ、苦しむ人を目の前にして平常心を保ちながら念仏することなど、到底できなかったのではないか。せめて、今自分に出来ることは何かを教義と自分の心の間で葛藤しながら考えていたのではないか。よって、私も親鸞は念仏を通して苦しむ人びとに寄り添っていたのではないかと考えている。

では寄り添う心とは、具体的にどのようなものだろうか。

## 第二節 悲しむ心に寄り添うこと

鍋島直樹氏は、親鸞が悲しむ心にどう向き合ったのかを、親鸞の曾孫にあたる覚如が親鸞について著した『口伝鈔』から次のように分析している。

たとひ未来の生処を弥陀の報土とおもひさだめ、ともに浄土の再開を疑いなしと期すとも、おくれさきだつ

一旦のかなしみ、まどへる凡夫としてなんぞこれなからん。―中略―ただありにかざるところなきすがたにてはべらんこそ、浄土真宗の本願の正機たるべけれど、まさしく仰せありき。―中略―なげきもかなしみももつともふかかるときについて、後枕にならびみて悲歎嗚咽し、左右に群中して恋慕涕泣すとも、さらにそれによるべからず。―中略―なげきかなしまんをいさむべからずと云々。〃

鍋島氏はこれを現代語訳で次のように訳している。

たとい未来に生まれるところが、阿弥陀仏の浄土であると思ひ定め、ともに浄土での再会を疑いなく信じていても、死別のひとたびの悲しみが、惑いの多い凡夫にどうしてないでしょうか。「ただありのままに、何の飾りようもない私の姿を自覚させてくれる人こそ、浄土真宗における本願の正機にかなった人であろう」と親鸞聖人は仰せにられました。「愛する人との死別の悲しみはとてもつらいことであるから、亡き人の枕もとや足もとで、むせびなき、亡き人の左右に集まって恋慕し、声を上げて泣いたとしても、決してその涙によって、往生が左右されたりはしない。だからこそ、嘆き悲しんでいるのをいさめるべきではない」と親鸞聖人はおっしゃいました。〃

ここからわかるように、人間が本当に悲しい時、無理にその感情を押しとどめるのではなく、嘆き悲しむ凡夫として思い切り悲しみを吐き出すことが大切であると親鸞は説いている。よって、悲しんでいる人に寄り添うとき「頑張ろう」とか「元気出して」など、悲しみから気を逸らすような励まし方をするのではなく、悲しみを吐き出しやすくなる工夫、例えば相手が座っていればこちらと同じように座り、視線を同じ高さにするとか、話を真

剣に聞いていることが伝わるような相づちを打つなど、相手の性格に合わせた工夫をする必要があるのではないだろうか。

二つ目にこのような記述がある。

かなしみにかなしみを添ふるやうには、ゆめゆめとぶらふべからず。もししからば、とぶらひたるにはあらで、いよいよわびしめたるにてあるべし。「酒はこれ忘憂の名あり、これをすすめて笑ふほどになぐさめて去るべし。さてこそとぶらひたるにてあれ」と仰せありき。しるべし。」

鍋島氏はこれを次のように訳した。

葬儀や法事の際、遺族に対して、悲しみにさらに悲しみが増すようには、決して弔ってはならない。もしそのようにしたならば、慰めたことにはならず、ますます心寂しくさせてしまうことになるでしょう。「酒には、憂いを忘れるという『忘憂』という呼び名がある。だからこの酒を勧めて、相手にほほえみが生まれてくるほどに慰めて帰るのがよいだろう」と、親鸞聖人は仰せにされました。」

このように親鸞は、悲しんでいる人を必要以上に悲しませることはあってはならないと説いている。十人悲しんでいる人がいれば、十人とも悲しんでいる度合いや大切な人を亡くした背景は違うので、軽率な言動は慎むべきであろう。ここで注意しておきたいのが、先述の悲しみを吐き出しやすいような工夫を誤解し、無理に悲しい空間を作ってしまったてはならないという点である。あくまでも寄り添うということを大切にしていきたい。また、ここでは悲しみを和らげるためにお酒を飲むことが勧められている。悲しみに向き合うことは大切であるが、心



を休めることも大切であろう。また、ここから親鸞の衆生、悪人と自覚する生き方がみてとれる。

このような段階を踏み、人は確かな心のよりどころを見いだすことで悲しみが和らいでいくという。鍋島氏は『口伝鈔』第十八章の「弥陀の浄土にまうでんにはと、こしらへおもむけば、闇冥の悲歎やうやくに晴れて、摂取の光益になどか帰せざらん。」という言葉を次のように訳している。

愁嘆の世界から離れて、憂いのない浄土で再会できることを心静かに導いていくならば、暗い闇に閉ざされた悲嘆は少しずつ晴れて、阿弥陀仏の摂取の光に包まれてゆくようになるでしょう。こそしてこの意味を

このように親鸞聖人は、いかなる悲しみにも壊されない他力の道があることを力強く示されています。深い憂いに覆われたこの世界の向こうに、暖かい安らぎの彼岸があることを見いだし、私自身が確かに生きていくならば、悲しみはやがて、思い出を糧に、新しい成長をうみだすというのです。自分の思いのコントロールによってではなく、本願他力によってこそ、悲しみや苦しさを離れていくことができるのです。こそとし、確かな心のよりどころを見いだすことによって、人は前に進んでいけるとしている。

私の祖母は、娘を病気で亡くしているのだが、「お浄土で会えるのが楽しみだ。」といつも話していたのが記憶に残っている。ここで問題なのは浄土が本当にあるのかという問題ではない。大切な人を亡くしたとき、心のよりどころをどのように見いだし、残りの人生をどう生きるかが問題である。また、浄土で会えると信じている内は本当の意味では死なない。なぜなら、残された人の心の中に、大切な人の心が生き続けているからである。

これまで述べた通り、悲しさを無理に抑えることなく、周りは悲しみにさらに悲しみが増さないように寄り添い、ときにはお酒を飲むなどして心を休め、段階を踏んで確かな心の拠りどころを見いだし、人は徐々に悲しみを乗り越えていけるとというのが親鸞の悲しむ心への向き合い方である。

### 第三節 生きていくうちに考えておくべきこと

人の亡くなり方は一人として全く同じものはないが、病氣と災害で亡くなることの大きな違いは、死ぬことを直前まで理解しているかどうかではないだろうか。私たちは普段友達と遊んでいるとき、家族と喧嘩していると きなど日常生活の中で死について考えることがあるだろうか。「命の有限性」について普段から考えておくことは、いつの時代、どんな場所でも必要である。死について考える手掛かりになる言葉に浄土真宗の「平生業成」がある。これについて本願寺前門主である大谷光真氏はこう述べている。

浄土真宗には「平生業成」という言葉があります。往生は普段から決まっている、死ぬ間際に決まるのではない、という教えです。平生から頭の片隅でもいいですから、人間は死ぬものだと思っていれば、そのときはたとえジタバタしたり右往左往したとしても、最終的には自らの死を納得して受け入れられるかもしれません。<sup>12</sup>

また、五木寛之氏はこの問題に対して次のように述べている。

今日で自分の一生が終わる、それでいいのかということ、五分でも十分でも実感を持って考えることは、

自分が死ぬということを夢にも考えなかったよりは、爪の先ぐらいは、慌てなくてすむのではないかと思っています。もつとも、いざそのときになったら、どうなるか分かりませんが。

今年に関西で自然災害が多い年であった。私が論文をこのテーマにした要因の一つである。特に大阪地震では、京都での揺れも強く、死について考えるきっかけになった。地震があった日のことである。揺れが治まってしばらくして外に出てみたのだがそこには普段とあまり変わらない人びとの生活があった。不思議なことに、それがあり難いような、だが自分だけが地震を恐れているかのような不安な気持ちが襲ってきた。しかしその不安も、時間の経過とともに薄れていき、今では地震が起きる前と同じように死について真剣に考えることなく暮らしている。普段から有限性を自覚し続けることは思いのほか難しい。また、お二人が述べられているように、いざ死ぬときはジタバタしたり、どうなるかわからない。しかし、死について全く考えないよりも、考えようと努力し続けているほうが有事の際、大きな意味を与えてくれると信じている。

また、有限性を自覚することは死の際のみに活かされるものではない。今、生きていることの有り難さに気づかされ、一日一日を大切に生きることができ。さらに、日常の「あたりまえ」に対し、感謝するようになる。よって、他の命への尊重にもつながり、他人を思いやることができたり、普段の食事に感謝でき、「理想の生き方」が宗教の考え方を通してできるようになるのではないだろうか。

## 第二章 真宗教義から考える差別問題

### 第一節 親鸞の平等観

人の歴史をまとめてみると、そこには常に差別が存在する。現代、世界全体でいえば、ユダヤ人、黒人、黄色人種などたくさんの人が差別の対象になっており、また差別される側もほかの人種を差別し、悪循環に陥っている。日本では、部落差別が一世代前には普通に存在しており、また現在では外国人に対する差別、さらに細かくいえば地方出身者を見下したり、喫煙、肥満、独身なども差別の対象として取り上げられている。また本来、教義の上で差別と闘わなければならないはずの本願寺までも、宿業論を利用して差別を容認していたという歴史もある。このように、人びとの心に根深く存在している差別について親鸞はどう考えたのだろうか。

『唯信鈔文意』から差別問題を考えるとき、鍵となるのは「いし・かはら・つぶて」や「屠沽の下類」という言葉である。

自力のころをすつといふは、やうやうさまさまの大小の聖人・善悪の凡夫の、みづからが身をよしとおもふころをすて、身をたのまず、あしきころをかへりみず、ひとすぢに愚縛の凡愚・屠沽の下類、無礙光仏の不可思議の本願、廣大智慧の名号を信樂すれば、煩惱を具足しながら無上大涅槃にいたるなり。具縛はよろづの煩惱にしばらくられたるわれらなり。煩は身をわづらはす、脳はころをなやますといふ。屠はよろづのいきたるものをころし、ほふるものなり、これはれふしというものなり。沽はよろづのものをうりかふものなり、これはあき人なり。これらを下類といふなり。(中略)れふし・あき人、さまざまのものはみな、い

し・かはら・つぶてのごとくなるわれらなり。如来の御ちかひをふたごころなく信樂すれば、(中略)いし・かはら・つぶてなどをよくこがねとなさしめんがごとしとたとへたまへるなり。<sup>14</sup>

現代語訳すると次のようになる。

自力の心を捨てるということは、大乘・小乗の聖人、善人・悪人すべての凡夫、そのような色々な人々、さまざまなものたちが、自分自身を是とする思いあがつた心を捨て、わが身をたよりとせず、ごさかしく自分の悪い心を顧みたりしないことである。それは、具縛の凡愚・屠沽の下類も、ただひとすじに、思いはかることのできない無礙光仏の本願と、その広く大いなる智慧の名号を信じれば、煩惱を身にそなえたまま、必ずこの上なくすぐれた仏のさとりに至るということである。「具縛」とは、あらゆる煩惱に縛られているわたしたち自身のことである。「煩」は身をわずらわせるということであり、「悩」は心をなやませるということである。「屠」は、さまざまな生きものを殺し、切りさばくものであり、これはいわゆる漁獵を行うものことである。「沽」はさまざまなものを売り買いするものであり、これは商いを行う人である。これらの人々を「下類」というのである。(中略)漁獵を行うものや商いを行う人など、さまざまなものとは、いずれもみな、石や瓦や小石のようなわたしたち自身のことである。如来の誓願を疑いなくひとすじに信じれば(中略)石や瓦や小石などを見事に金にしてしまうように救われていくのである、とたとえておられるのである。<sup>15</sup>

つまり、自力の心を捨て、如来の本願を信じれば、漁獵を行う者や商いをする人も身分の隔てなく仏の悟りに至

るということである。また、石や瓦や小石のような私たちがいう表現から、人間の作った職業による身分の差は如来の慈悲の前では大した意味がないことを示している。そして、親鸞の生きた時代にも差別があったことがみとれる。

私がこの文章の中でもっとも印象に残っているのは、「いし・かはら・つぶてのごとくなるわれら」の「われら」という言葉である。この「われら」とはなにを指しているのだろうか。親鸞は越後に流罪となった際、自らを「非僧非俗」と位置づけ、農民や商人、漁獵者などと共に生活していた。よって、このような身分の人びとが「われら」に含まれているのはいうまでもないだろう。しかし、親鸞の徹底した平等観はこれにとどまらない。歎異抄第五章に「一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり。」とある。この意味について『講座歎異抄』に次のようにある。

すべてのいのちあるものは、遠い過去世から現在に至るまで何度も生まれ変わっている間に、そのいずれかの「生」において、親子であり、兄弟の関係にあり得たというのである。『梵網経』に「六道の衆生は、皆、我が父母なり」とあるように、仏のいのちに目覚めるとき、すべてのいのちあるものが、深いつながりを持って生かされている事実を知らされる。深い生命観・人間観を表した言葉である。こ

このように、親鸞はすべてのいのちあるものを父母であり、兄弟であるとしている。彼がこのように述べていることから考察すると、「われら」とは身分の低いとされていた者だけでなく、全ての人間、生き物を対象としていることがわかる。そして、この意味は現代においても非常に重要である。なぜなら、差別の対象は流動的であ

り、今差別されていない者であってもその対象となる可能性があるからである。

親鸞の平等観は徹底されており、先に挙げた以外にも、『歎異抄』第六章に次のようにある。

専修念仏のともがらの、わが弟子、ひとの弟子といふ相論の候ふらんこと、もつてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももたず候ふ。よのゆゑは、わがはからひにて、ひとに念仏を申させ候はばこそ、弟子にても候はめ。弥陀の御もよほしにあづかつて念仏申し候ふひとを、わが弟子と申すこと、きはめたる荒涼のことなり。<sup>18</sup>

現代語訳は次の通りである。

もっぱら念仏を修めている人々の間で、自分の弟子だ他人の弟子だというあらそいがありますよなこと  
は、とんでもないことである。私、親鸞は弟子を一人たりとも持っておりません。というのは、私の考えに  
よってひとに念仏を申しあげていきますならば、その人は私の弟子でもありません。阿弥陀仏の  
うながしなされることにあずかって念仏申しあげます人を自分の弟子だと申すことはまったくあきれはてたこ  
とである。<sup>19</sup>

このように、弟子を持たないことから、親鸞の強い平等観がみてとれる。彼は同じ念仏者を弟子の代わりに  
「御同朋」と呼んでいる。共に念仏して阿弥陀仏に救われていく仲間であると捉えていたのだ。さらに『教行信  
証』信巻本には次のようにある。

おおよそ大信海を按んずれば、貴賤・縉素を簡ばず。男女・老少を謂わず。造罪の多少を問わず。修行の久

近を論ぜず。行にあらざ。業にあらざ。頓にあらざ。漸にあらざ。定にあらざ。散にあらざ。正観にあらざ。邪観にあらざ。有念にあらざ。無念にあらざ。尋常にあらざ。臨終にあらざ。多念にあらざ。一念にあらざ。ただこれ不可思議・不可称・不可説の信樂なり。喩えば阿迦陀菓のよく一切の毒を滅するがごとし。如来誓願の菓は、よく智愚の毒を滅するなり。<sup>10</sup>

現代語訳は次の通りである。

およそ弥陀の大信心の海について思いをめぐらせば、貴賤や僧俗を選ばず、老若男女を言わず、造る罪の多少を問わず、修行の長短を論ぜず、信心する一切のものを浄土に迎えてくだされる。それは自力の行ではなく、自力の善ではなく、自力の頓悟ではなく、自力の漸進ではなく、自力の定善ではなく、自力の散善ではなく、すべて自力の正観でも、邪観でも、有念でも、無念でも、平生時の念仏でも、臨終時の念仏でも、多念でも、一念でもない。ただこれ、思議すべからざる、説くべからざる、言うべからざる信心である。たとえば阿迦陀菓（不死の菓）が一切の毒を滅ぼすようなものである。如来の誓願の菓は智者であれ愚者であれ、一切の自力の毒を滅ぼすのである。<sup>11</sup>

これについて仲尾俊博氏は『仏教と差別』において、次のように述べている。

他力の信の世界は人間の差別、人間の思慮分別をこえた世界であり、信心を思想化する立場をも否定している。すなわち相対的差別の一切を絶対否定して、しかもすべてを他力の信において絶対平等に包容する超越の世界の風光をしめしている。このような絶対超越の如来のまえには、すべてのひとは「御同朋、御同行」



として、人間はおたがいに差別するのではなく、賤視するのではなく、おたがいは人間存在として現実のみにくい自己をふかく内観させられ、反省させられて、差別を超越した真実平等の世界につつまれるのである。<sup>22</sup>

つまり我々は、おのおのの醜さ、罪悪性を内省することによって仏となるのである。その中に身分の優劣など存在しないことはあきらかである。むしろ、同じ醜い存在である衆生が、他力によって救われていくということを共に喜び、念仏する仲間であると捉えるのが自然である。

以上から、親鸞は仏のもとでは全てのものが平等であると考えていたことがわかる。

## 第二節 「宿業」についてどう考えるか

前節の冒頭でもとりあげたが、真宗教義から差別について考える際、宿業という言葉が問題になってくる。宿業について、次のように解説されている。

「業」は、造作の意で、身(行為)、口(言語)、意(意志)のはたらき(三業)をいう。これらの業が因となって次の在り方が導かれる。業の思想は過去の偶然性にゆだねて悔み、自己の責任を転嫁するところの運命論ではない。宿業観はあくまで、仏の本願の心にうなずくところに成り立つのである。すなわち、信心の内容として成立するのである。<sup>23</sup>

つまり、この世のことはもうすでに決まっているから、今起こっていることは仕方ないとするものではなく、過

去世から積み重ねてきた行いにより、思ってもいない悪を働いてしまう自身を、悪人であると認識し戒めるためのものである。

現代において、仏教はニヒリズム的であるという批判を浴びる要因のひとつに、前者に挙げられている宿業の運命論的解釈がある。実際、過去にそれを利用し、「差別されている人は前世からの業によるものだから仕方ない」という自己責任論で差別問題解決に取り組むべきでないという主張があった。当然、被差別者からすればとんでもないことである。宿業を利用してそのように考えている人は、自分や身の回りにとんでもない程の不幸が訪れた時、「前世で決まっていたことだから仕方ない」と果たして割り切ることができらるだろうか。真宗教義から考えると、業を持った悪人同士、みな平等な存在として助け合い、救われていくはずである。

また仮に、運命論的考えをあてはめるとするならば、今差別している人は来世で差別した報いを受けることになる。よって、全てのものは来世以降のために現在、差別解消のための努力をすべきであろう。

### 第三節 他者をどうみるか

差別は、他者を蔑むことによって自分の自尊心を高めるためであるとか、支配階級が下の階級の不満の矛先としてさらに下の階級を設定し、それを卑しいものとすることによって生じたとされている。つまり、差別の原因は「自分中心」の考え方が根底にあるといえる。真宗教義から考えると、自分中心の考え方が正しいとはいえない。『愚の力』に次のようにある。

互いが支え合っているから、私が成り立っている。そして私もまわりを支える一端を担っていることを知るので。まず人間同士の支え合い。家族や友人から地域、社会、国、そして地球全体へと人間同士の支え合いの視野を広げてみましょう。さらに広げて、動植物のいのちも支え合っています。そこが分かってくると、空気や水があつて、すべてのいのちが成り立っているというまでに世界観が広がってゆきます。<sup>25</sup>

自分は自分だけで生きているのではない。また他者も他者だけで生きているのではない。祖先や子孫など縦のつながりと、今生きている全ての存在、横のつながりとが複雑に絡み合っていて、自分が生かされていることを知るのである。このように、自分という存在を遠くから見ると、自分だけを中心にして行動してはいけなないと気づかされる。

また、科学的にはなるが、人間だけでいうと、もっと遺伝子レベルで他人が自分のことのように感じられる研究がある。

化石の研究とは別に最近では、ミトコンドリアのDNAやY染色体の塩基配列を調べることによって、さらに厳密に人間の歩んで来た道がわかるようになってきました。(中略)遺伝学者のブライアン・サイクスは、骨からのDNAを抽出する方法を開発して、世界中の人から採取した試料のミトコンドリアDNAの塩基配列を比較しました。その結果、世界中の人のミトコンドリアDNAを三五の群(クラスター)に分けることができました。これらの人々の系譜を調べていきますと、世界中に暮らす六〇億人の人たちが、ただ一人の女性の母系子孫であることがわかったのです。<sup>25</sup>

このように、現代の地球の全ての人は、何世代も前の世界の一人の母親によって生み出されているというのだ。このことを踏まえてみると、他人の問題は他人事では済まないと感じるようになってくる。まさに「一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり」なのである。他者のことを本気で考えるようになれば、差別も含め、世界のあらゆる問題は解決に向かうだろう。

### 第三章 真宗教義から考える現代の生物に関する諸問題

#### 第一節 浄肉文から肉食を考える

現代の日本人は動物に対してどう考えているだろうか。動物倫理を扱う文献に「民法や刑法の上では動物は植物や無生物とまったく異ならない「物」として扱われ、たとえば他人のペットを殺してしまったような場合、第一に適用されるのは「器物損壊罪」になります。」<sup>26</sup>とある。ペットショップではかわいい犬や猫のガラスケースの前に人が集まり賑わっているがその一方、動物愛護センターでは心無い飼い主によって捨てられた動物たちが殺処分されている。また、食品の廃棄も問題になっているが、言い換えれば、たくさんの生き物たちが人間の口に入ることなく処分されていることになる。

現代社会において、取り組まなければならない生き物に関する問題は多そうだが、その中でも食肉の問題について考えてみる。親鸞は肉を食べること、他の生き物を殺すことについてどう考えただろうか。

本宗 敵

親鸞は『涅槃経』から『浄肉文』を書写している。食べてはいけない肉について記されており、人・蛇・象・馬・獅子・犬・狐・猪・猿・驢の十種は不浄肉であり、食べてはいけないものとされている。つまり、そのほかの肉については食べてもよいということになるが、そこで出てくるのが見・聞・疑からなる三種の浄肉である。見は殺されるところを見ていない肉であり、聞は自分のために殺されたのだと聞いていない肉であり、疑は自分のために殺されたものかもしれないと疑わずに食べる肉のことである。これらの条件を満たすと浄肉となる。

親鸞はなぜ、この文を取り上げたのだろうか。見・聞・疑の条件を満たせば肉食が可能というのは自分勝手な考え方であるように思う。親鸞は人間が罪悪性に満ち溢れていると説いていたことから、生きるために他の命を奪わないと生きていけないこと、また三種の浄肉から人間の自己中心性を表現し、慚愧の思いからこの文を取り上げたのではないだろうか。

慚愧の念を持ち生活することは、現代社会においても大切である。スーパーマーケットにいくと、きれいに包装された肉や魚が並んでいる。そのような環境では、どうしても他の命を奪っているという実感が湧きにくい。そして、ドキュメンタリー番組で肉食動物が草食動物を狩っているシーンを見て「かわいそう」といいながら食事をして、それを残し、ごちそうさまと言わないようになってしまった。

他の命を奪っているということを頭の片隅に置いておけば、節度ある生活ができるようになるのではないだろうか。

第二節 人間以外の視点で考える

わたしはサケである。先日、人間に妻と子供たちを奪われた。人間世界では、親子丼というものがあるそう  
だ。私たちを切り身にしたものと私たちの子供をご飯の上のせて食べているそうだ。恐ろしい。絶対に、人間  
にはつかまってはならない。

このように、他の生き物の立場になって考えたことがあるだろうか。私の場合、このような思考は子供の頃は  
豊かであったが、年を重ねるにつれ少なくなってきたように思う。

金子みすゞ氏の詩に『大漁』がある。

朝焼小焼だ

大漁だ。

大羽鱈の

大漁だ。

浜はまつりの

ようだけど

海のなかでは

何万の

鱈のとむらい

コピィー 厳禁

するだろう。

私は小学校一年生の時、初めて釣りに行き、いわしを釣った。当時はかわいそうと感じ、少し逃がしたりバケツで泳がせたりしていた。今でもたまに行くのだが、いわしを殺してもあの頃ほど心は痛まない。あの頃の感覚を大切にしたいと思う。人間は他の命を奪って生きていくことしかできない。しかしそれをもっと自分の深いところで理解し、慚愧して、節度ある生活をする必要があると考える。身近なところでは、スーパーマーケットで消費期限の近いものから購入して廃棄の削減に貢献したり、暴飲暴食をせず、食べ物を粗末にしないことなどがあげられる。また、「いただきます」「ごちそうさま」という言葉には、ほかの命を頂いているという、人間が忘れがちになっていることを思い出させてくれる。この言葉は仏教国である日本だから生まれた言葉だろう。だとしたら、「草木国土悉皆成仏」<sup>22</sup>を説く仏教を旨としている国こそ、率先して行動していくべきだろう。

最後に、輪廻転生から仏教の生命観について考察する。全ての生命は、一度死ぬとまたほかの生命に生まれ変わるといふ考え方である。つまり私たち人間も、死後は他の動物や魚などになる可能性がある。こう考えると、人間以外の生命に対して、親近感が湧いてくるのではないだろうか。高田文英先生は輪廻転生について次のように述べている。

例えば土砂降りの雨の日に外で出会った知人には、普段親しく話す間柄でなくても「大変な雨ですね」と自然と会話が弾むことがある。それは互いに苦しい状況を共有しているという親近感からである。仏教の業の思想にもとづく輪廻転生の説は、それと同じような「お互いに変な」という親近感をあらゆる生命

に対して育むものということが言えよう。<sup>28</sup>

このような見方で他の生命と向き合うと、死別のかなしみに自然に寄り添うことが出来る。差別を解消することができる。そして、動物や魚、虫、鳥などの生命を尊重することができる。

私は一回生の初めての課題図書レポートで輪廻転生はあるのかという題で取り組んだ。そのときは、あるのかという面ばかりを見てしまい輪廻転生がなにを伝えようとしているのかが理解できなかったが、偶然にも私の卒業論文で問題にしていたことは、この輪廻転生を手掛かりにして解決することができそうだ。

## 結論

これまで三章に渡り、現代社会の様々な問題について述べてきた。真宗教義から考え、一応の対応策は検討することができた。しかし、これまで述べてきたことはかなり理想論的である。「世々生々の父母・兄弟なり」とはいつでも、兄弟や親や子を殺したというニュースはたびたび報道される。また自分一人で生きていけないとわかっていのに、高慢になり、他人を批判したり見下したりする。普段の生活では、他の命を奪って生きていることもついつい忘れてしまい食べ物を無駄にしてしまう。なぜなら私たちは「人間」だからだ。私たちが「人間」である以上、怒ったり、人を評価するなど、自分中心の行動をしてしまう。そこからさらにさまざまな問題へと広がっていく。だからこそ親鸞は、比叡山を下山し、法然の説く専修念仏による他力の道を歩んでいったの

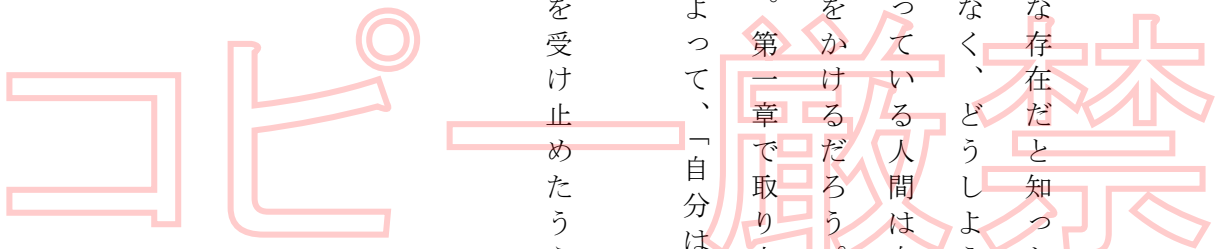


だろう。

では私たちは、人間がどうしようもない愚かな存在だと知ったうえで、どうすべきであろうか。そこはやはり、どうしようもない存在だと開き直すのではなく、どうしようもない存在だけれども、という考え方で自分が出発することを実行していくことだろう。開き直っている人間は自分の中の悪が常に働き、暴走してしまうが、内省的な人はたとえ悪を犯しても反省し、歯止めをかけるだろう。

ただ、人間は決して悪いだけの存在ではない。第一章で取り上げたように、悲しみによりそう心を持って、辛いことを共に乗り越えていく力を持っている。よって、「自分はだめなやつだからなにをしても無駄だ」などとニヒリズムになる必要はない。

私たち一人一人が人間の罪悪性、自己中心性を受け止めたうえで、日々をどのように生きていくかが大切である。



- 1 本願寺出版社『注釈版第二版』八一六〜八一七頁
- 2 梅原眞隆『恵信尼文書の考究』四十七頁
- 3 直江清隆・越智貢『災害に向きあう高校倫理からの哲学別巻』二十九頁
- 4 直江清隆・越智貢『災害に向きあう高校倫理からの哲学別巻』二十九〜三十頁
- 5 本願寺出版社『注釈版第二版』九〇五〜九〇六頁
- 6 本願寺出版社『死別の悲しみと生きる―ビハラの心を探る―』八〜九頁
- 7 本願寺出版社『注釈版第二版』九〇七頁
- 8 本願寺出版社『死別の悲しみと生きる―ビハラの心を探る―』十六頁
- 9 本願寺出版社『注釈版第二版』九〇七頁
- 10 本願寺出版社『死別の悲しみと生きる―ビハラの心を探る―』二十四頁
- 11 本願寺出版社『死別の悲しみと生きる―ビハラの心を探る―』二十四頁
- 12 大谷光真『愚の力』八十二〜八十三頁
- 13 五木寛之『他力』六十二頁
- 14 本願寺出版社『注釈版第二版』七〇七〜七〇八頁
- 15 浄土真宗教学研究『唯信鈔文意現代語版』十九〜二十一頁
- 16 本願寺出版社『注釈版第二版』八三四頁
- 17 中西智海『講座歎異抄』四十八頁
- 18 本願寺出版社『注釈版第二版』八三五頁
- 19 中西智海『講座歎異抄』五十八〜五十九頁
- 20 本願寺出版社『注釈版第二版』二四五〜二四六頁
- 21 眞継伸彦『親鸞全集1教行信証上』一六六頁
- 22 仲尾俊博『仏教と差別』九頁
- 23 中西智海『講座歎異抄』一一九頁
- 24 大谷光真『愚の力』四十六頁
- 25 小森龍邦『親鸞思想に魅せられて』五十五頁・柳澤桂子『永遠のなかに生きる』より
- 26 伊勢田哲治・なつたか『マンガで学ぶ動物倫理』十六頁
- 27 涅槃経より
- 28 高田文英『仏教・真宗の生命観―人権・平和論への一視座―』四頁

参考文献  
書籍

- 五木寛之『他力』講談社・一九九八年  
 伊勢田哲治・なつたか『マンガで学ぶ動物倫理』化学同人・二〇一五年  
 梅原眞隆『恵信尼文書の考究』永田文昌堂・一九六〇年  
 大谷光真『愚の力』文藝春秋・二〇〇九年  
 小林照幸『ペット殺処分』河出書房新社・二〇一二年  
 小森龍邦『親鸞思想に魅せられて』明石書店・二〇一四年  
 浄土真宗教学研究所『唯信鈔文意現代語版』本願寺出版社・二〇〇三年  
 浄土真宗本願寺派総合研究所『注釈版第二版』本願寺出版社・二〇〇四年  
 同和教育振興会『信心の社会性』探究社・一九九八年  
 直江清隆・越智貢『災害に向きあう高校倫理からの哲学別巻』岩波書店・二〇一二年  
 仲尾俊博『仏教と差別』永田文昌堂・一九八五年  
 鍋島直樹『死別の悲しみと生きる』ビハラの心を求めて―』本願寺出版社・二〇〇一年  
 鍋島直樹・玉木興慈・黒川雅代子『生死を超える絆親鸞思想とビハラ活動』方丈堂出版・二〇一二年  
 鍋島直樹『アジャセ王の救い王舎城悲劇の深層』方丈堂出版・二〇〇四年  
 真継伸彦『親鸞全集1教行信証上』法蔵館・一九八三年  
 B・ガンター『ペットと生きる―ペットと人の心理学―』北大路書房・二〇〇六年  
 論文  
 浅井成海『同朋運動の基本理念―仲尾論文に学ぶ―』『信心の社会性』一九九八年  
 高田文英『仏教・真宗の生命観と人権・平和論への一視座』『日本仏教学会年報』第八十三号より  
 仲尾俊博『悪平等論と宿業論』『信心の社会性』一九九八年  
 林智康『親鸞と涅槃経―肉食妻帯に関して―』『印度学仏教学研究』二一〇号・一九七四年  
 三明智彰『親鸞の仏性観』『大谷学報』二二〇号・一九八四年  
 吉田宗男『浄肉文』をめぐる問題』『大谷学報』四〇号・一九九六年